

幼少期から青年後期に至る呼称の推移と多様性

The Changes and Differences of Japanese Names from
Childhood to Late Youth

下野 雅 昭

Masaaki SHIMONO

一 目的

幼少期から青年後期に至る成長期において、当世の若者はみずからどのように呼ばれて育ってきているのだろうか。本稿ではその呼称について、形式を成長段階と性別（男・女）で見していきたい。

人はこの世に生れ落ちるとすぐに名前がつけられ、戸籍に登録されて正式の姓名が決まる。名前がついてのち、主にそれで呼びかけられることになるが、必ずしもその通りに呼ばれるとは限らない。戸籍名がハルトモ（稔智）であるのにミノルとかミノと呼ばれ、当人も周囲も何ら違和感を覚えていない男性や、姓・名で呼ばれる場合でもヤマグチ（山口）という姓のところをヤンチとよく声をかけられている人、キヨカズ（清和）という名がカズと呼びならわされている人がいたし、接尾辞がつく場合でもタカコ（隆子）がタカチャンのほかにもタカチャと呼ばれる女性があり、芸能人の小倉優子はユウコリン、酒井法子はノリピーで、元プロ野球選手の清原和博は高校生のころキヨマと呼ばれていたという。

右にあげた例を見るだけでも、呼称にさまざまな形式が存在するらしい様子がうかがわ

れるが、男と女で形式にちがいがあのかないのか、出生後、成長する過程で同一人がいつも同じ形式で呼ばれ続けるのか、それともちがってくるのか。それが本稿で考えてみたいことである。男の子が名前ではなくボクと呼ばれるのはありがちとしても、二十歳前後になってもそれが続いているのを想像すると、落ち着かない感じがしないでもないし、高校・大学等の教育機関を終了して社会人になると、それまでとちがってバラエティが少なくなるようにも思われる。また二十歳前後の社会人と大学生とではそれほど年齢差がないのに対して幼少期と青年後期とではずいぶん差があるが、教育機関にあるうちは何となくどこも同じ空気の中にあるように見える。

このようなことから、大学に通う学生を対象に現在も含めてそれまでに在籍した教育機関で、それぞれがどのように呼ばれていたか呼ばれているかを調査し、その回答を分析することで冒頭に掲げたねらいに迫りたい。

二 方法

調査は、名古屋市とその近在の大学に通う学生（1～3年）を対象にアンケート用紙を

配布し、それに記入してもらう方法で2007年秋に実施した^{#1}。調査は、回答する本人が周囲から何と呼ばれていたか呼ばれているかを問うもので、学校等を次の6つに分け（以下、これを「校種」と呼ぶ）、それぞれに記入して答えるよう求めている。

- 校種：1 幼稚園
- 2 小学校低学年
（略して、「小低」とも）
- 3 小学校高学年
（略して、「小高」とも）
- 4 中学校
- 5 高校
- 6 大学

アンケート用紙には名前と性別を記入する欄があり、回答をこれと照らし合わせることで呼称と姓・名・性別のつながりを吟味することができる。

三 集計の基礎

前章で述べたやり方で最終的に回収できた調査票は男30人、女29人 つまり

回答者数：男 30 女 29
となった。

回収した調査票に当たって回答の出方をみると、回答記入欄が男180（30人×6校種）女174（29人×6校種）合計354のところ、無回答欄が男2（幼稚園2）女1（小低1）で

回答総数：472（男212 女260）であった。このうち、1つの記入欄に2つの回答があるものがあり（3つ回答があるものはなかった）、それを男女別に見ると次のようになる。

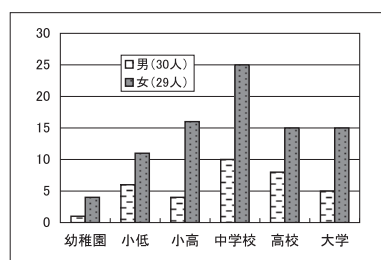
複数回答数：男 34 女 86

無回答が女に少なく、複数回答が男より女のほうに2倍以上あるため、性別の回答総数は女が男より2割方多くなっている。また校

種1つに回答が1つのみと想定すると、男女とも1人当たり6回答になるところ、男7.1回答 女8.9回答であった。女性回答者は1つの記入欄に平均で1.5近い回答をしたことになる。

複数回答の出方を校種別男女別に見ると、図1のようになる。どの校種でも女が男を上回っており、小学校高学年より上の校種に複数回答が多く出ていることが分かる。

図1 複数回答がある校種と回答数（男女）



四 呼称の形式と成長段階・性別

一 調査結果の分析

1 分析のための単位

回答された呼称の形式を見るために、呼称、接尾辞のほか呼称基、呼称基元という単位を設定して分析を進めていく。また名を姓名の名、すなわち姓に対する名をいうものとする。

呼称は自分が呼びかけられたときの名前全体をいい、このたびの調査では記入欄に書かれた回答そのものである。第1章にある10例ではミノル、ミノ、ヤンチ、カズ、タカチャン、タカチャ、ユウコリン、ノリピー、キヨマ、ボクがそれにあたる。これらを姓名（ユウコリン、ノリピーの場合は芸名）との関係で分類すると、姓名（芸名を含む）に由来するものとそうでないものに分けられる。

姓に由来するもの：ヤンチ、キヨマ

名に由来するもの：カズ， タカチャン，
 タカチャ， ユウコリ
 ン， ノリピー

姓・名に由来しないもの：ミノル， ミノ，
 ボク

また10例のうち姓名に由来する呼称は，姓・名の部分（その一部分を含む）と接尾辞に分離できる。呼称から接辞を除いた形式を呼称基と呼ぶことにする。

呼称基：ヤンチ， キヨ（姓由来）

カズ， タカ， ユウコ， ノリ（名由来）

接尾辞：チャン， チャ， リン， ピー， マタカチャン， タカチャ， ユウコリン， ノリピー， キヨマは呼称基＋接尾辞でできている呼称で，ヤンチ， カズは呼称基のみから作られている呼称になる。

呼称基元は呼称基の由来となった本体をいう。例にあげた呼称基では次の（ ）内が呼称基元である。

ヤンチ（ヤマグチ） キヨ（キヨハラ）

カズ（キヨカズ） タカ（タカコ）

ユウコ（ユウコ） ノリ（ノリコ）

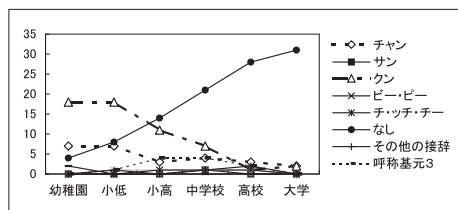
ヤンチ， カズは呼称基のみからなる呼称であるが，ヤンチは姓由来，カズは名由来で，両方とも呼称基元が略されて成っており，ユウコリンは名が呼称基元となってそのまま呼称基を作り，それに接尾辞リンが接続して成った呼称ということになる。

2 接尾辞について (1)

前節で設定した呼称基などの単位を援用しながら，まず呼称の接尾辞について分析する。回答には典型的な接尾辞であるチャン，サン，クンがついた呼称（例，裕子を裕チャン，理衣を理衣サン，晃彦を晃クンなど）のほか，ピー（智彦を智ピーなど）， ッチ（麻衣を麻

衣 ッチなど）がついた呼称，接尾辞がつかない呼称（以下，接尾辞「なし」とする）などがあった。そういう呼称を男の回答総数212について，接尾辞の7種類（チャン，サン，クン，ピー・ピー，チ・ッチ，なし，その他の接辞）およびそれ以外のもの（呼称基が姓名に由来せず接尾辞が接続していないもの。仮に「呼称基元3」とする）をあわせた8つで分類し，回答を校種別に集計してグラフにすると次のようになる^{#2}。図2を見ると，男の接尾辞の中心はクン，チャン，「なし」で，そのほかのものはどの校種でも5回答に満たないことが分かる。またクン，チャン，「なし」のあいだでそれぞれに推移があり，クンは幼稚園と小学校低学年で他を圧倒しているが，小学校高学年では「なし」に首位を譲ってそれより上位の校種では徐々に少なくなり，高校，大学では数えるほどになる。これに対して，「なし」は幼稚園では回答数4で3番目に位置するものの，それより上の校種では右肩上がりに増えていき，高校，大学では30前後にのぼって下がるところがない。チャンは幼稚園がいちばん多くこの校種の第2位であるが，それ以降増えることはなく，傾向としてはクンと似ている。

図2 接尾辞類の回答数（男）

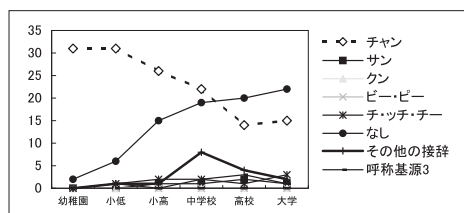


男の呼称の接尾辞は，下位校種で優勢なクン，チャンが上位の校種になるにつれて「なし」に交替し，高校，大学はほとんどがこれで占められ，他は数えるほどでしかないことが見てとれる。

続いて女の回答を男と同じようにして校種

別に見てみよう(図3)。チャンは幼稚園で他を圧倒し、この校種はほとんどこれ一色といってよい。数値が回答者数を越えているのは、複数回答があるためであるが、小学校低学年で同じ数値を得たあと、それより上の校種で徐々に少なくなり、高校、大学では15前後に落ちる。この推移のしかたは男のクンと似ているが、チャン(女)のほうがどの校種でも数値が高い。

図3 接尾辞類の回答数(女)



これに対して「なし」は幼稚園でごく少ない。しかし、小学校高学年から急速に伸びて最終校種まで下がることなく、高校段階でチャンと入れ替わって首位になる。

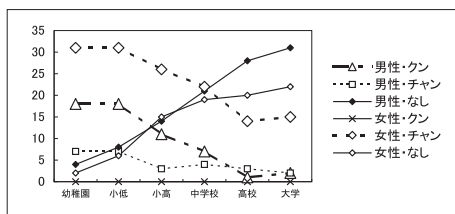
チャン、「なし」以外で注目したいのは「その他の接辞」である。数値はそれほど大きくないが、中学校で急に回答数8になり、高校でも4、大学で2。その接尾辞にはコ(リーコ(名は理衣)ほか)、タン(ミータン(名は美晴))、ヤン(アユヤン(名は会有子))、リン(マリリン(名は真梨)ほか)、ン(ユッカ(名は、ゆかり))、ジ(オカジ(姓は岡野))などがあって多彩である。

男の場合でもマ(アラタマ(名は、新))、ヤン(タケヤン、姓は竹内)などがある。

さて、ここでこれまでに出てきた主要な接尾辞クン、チャン、「なし」について、男女での現われ方を見てみよう(図4)。

図4を見ると、これまで述べてきた3接尾辞の校種間での推移と男女間の異同がよくわかる。チャンと「なし」が男女同じ推移を示しているといえよう。またチャン(女)は小学

図4 「なし・クン・チャン」の男女比較(回答数)

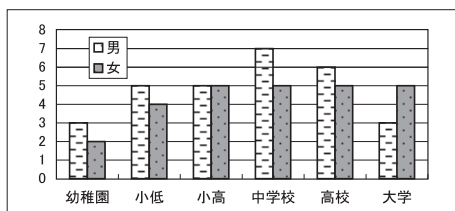


校低学年以降それより上の校種で数値を下げ続けるものの、高校大学に至るとある程度で下げ止まるのに対し、「なし」は男女とも小学校低学年から上の校種で増えつつあるが、高校、大学の女では増え幅が小さくなって男とのあいだに開きが生まれていることもわかる。「なし」の高校、大学における男女間の差には、この校種におけるチャン(女)の下げ止まりが関係しているものと思われる。すなわち、高校、大学の男は「なし」以外の接尾辞でほとんど呼ばれることがないのに対して、女はこの校種でもまだまだチャンをつけて呼ばれているということの現われであろうと考えられる。

3 接尾辞について(2)

前節「接尾辞について(1)」では、接尾辞の7種類およびそれ以外の合わせて8つで呼称を分類したが、このうちの7種類(チャン、サン、クン、ビー・ピー、チ・ッチ、なし、その他の接辞)を校種ごとに異なり数として集計すると、どのようになっているであろうか。そのような考えで回答を男女別に整理し

図5 接尾辞の種類(異なり数)



たのが図5である。

これをみると、幼稚園から中学まで男女とも接尾辞の種類（異なり数）がだんだん増えていくが、中学から高校、大学にかけて男はこれまでとは逆に徐々に少なくなり、大学に至って幼稚園と同じ数にまで減少する。これに対して女は中学以降も大学まで同じ数を保ち、高校までは男と同じ数かそれより1～2種類少ない校種が多かったのが、大学で男より2種類多くなっていることがわかる。男は成長とともに早い時期から接尾辞が増えていき、また種類が少なくなる時期も早いものに対して、女は成長とともに増えてそのまま持続しているのである。

続いて接尾辞7種類に含めた「その他の接尾辞」の中味について検討したい。ここには接尾辞と認定できるかどうか迷いがあるものや形式ごとの合計回答数が少ないものを一まとめにしておいたものである^{注3}。回答例は前節でいくつか紹介したが、それらを異なり数と延べ数で男女別に集計（括弧内が延べ数）したのが表1である。

表1

校種	男	女
幼稚園	0	0
小低	1 (1)	1 (1)
小高	0	1 (1)
中学	1 (1)	4 (8)
高校	2 (2)	3 (4)
大学	0	2 (2)

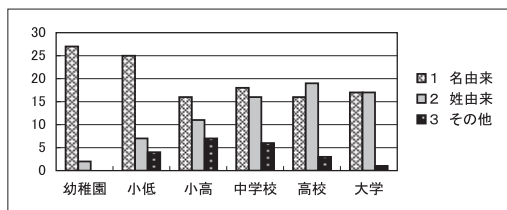
これを見ると^{注4}、男女とも共通して小学校低学年から数字が出てくるが、男は上位校種において異なり数延べ数とも大して増えず最上位の大学にはないものに対して、女は上のどの校種にも異なり数延べ数ともにあり、中学より上では異なり数延べ数とも小学校低学年より増えて、大学にも存在するところにちがいがあ。このありさまは前述の接尾辞7種の姿と重なるものであるが、とりわけ増えて

いるのが中学、高校であることにも注意したい。

4 呼称基元について

呼称基元から呼称を男女別に分析すると、どのようになるかをここで見ることにする。男の回答総数212を、1名由来、2姓由来、3姓・名以外（「その他」とする）に分け、それを校種別に見ると図6のようになる。幼稚園と小学校低学年では名由来の呼称基（例、名の晃彦を呼称基元とする呼称アキクンのアキなど）が大部分を占め姓由来は大変少ないが、それより上の校種になると、名由来が3割方少なくなるのに対して、姓由来（例、姓の平田を呼称基元とする呼称ヒラタクンのヒラタなど）は少しずつ数値を伸ばし、中学校より上の校種ではほぼ拮抗するようになっている。

図6 呼称基元の回答数（男）

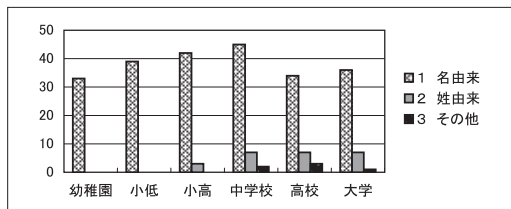


「その他」（ブチ、カロなどがあるが、どれも姓・名とのつながりはわからない）は数が少ない。しかし、その現われ方に注意したい。小学校低学年から出現し始め、中学校に向けて数を伸ばしたあと減っていく。姓由来とともに増えつつ小学校高学年・中学校がもっとも盛んである様子が見て取れる。

女の回答総数260を男と同じように校種別にしたのが図7である。全体の9割が名由来で、姓由来は多い校種でも2割程度に過ぎず、男とのちがいが明確に出ている。女は大部分が名由来の呼称で呼ばれるのである。

「その他」^{注5} は回答数が大変少ないが、男と比べて校種が上位にずれつつも同じ傾向を示している。

図7 呼称基元の回答数（女）



5 名・姓と呼称基と拍数について

(1) 名・姓の拍数

名と姓が呼称に取り込まれて呼称基になるとき、相互の拍数がどのようになっているかを考える。それに先立って、それらが何拍でできているのかを見ておく。表2は名の拍数を、表3は姓の拍数をそれぞれ男女別に集計したものである。これを見ると、男と女では名の拍数の分布がちがっていることがわかる。男の名に2拍はなくて3・4拍がいちばん多い（裕紀ヒロキ、晴信ハルノブなど）が、5・6拍も1人ずつある（新之助シンノスケ、浩一郎コウイチロウ）。それに対して女の名は2・3拍からなるもの（美紀ミキ、千里チサトなど）がすべてで、なかでも3拍の名は2拍のおよそ3倍になっている。4人に3人が3拍の名であることになる。

姓の拍数は名の場合とちがって男女とも3・4拍に集中している（加藤カトウ、川村カワムラなど）ものの、2拍・5拍（野田ノダ、榎原サカキバラなど）も存在する。また3拍と4拍のあいだで数の開きや男女の差がほとんどない。名とちがって姓は新しくつけられることがないのだから、性別に関係ないことがここに現われていると見られよう。

表2

名拍数	男	女
2	0	7
3	13	22
4	15	0
5	1	0
6	1	0
7	0	0
計	30	29

表3

姓拍数	男	女
2	1	4
3	13	11
4	13	14
5	3	0
6	0	0
7	0	0
計	30	29

(2) 名と呼称基と拍数

いま見たような名が呼称基に取り込まれると何拍になるのだろうか。表4が男、表5が女である。男の場合、3拍からなる名の呼称基は7割方が同じ3拍であるのに対して、4拍からなる名の呼称基は6割が2拍になっており（例、晴信がハルなど）、3拍名に比べて短くなる傾向が強い。短くなる傾向は3拍の名にもある（例、弘樹がヒロなど。およそ3割）が、4拍名のそれはより短く2拍になるところにちがいがあがる（表4）。3拍名の呼称基はそのまま3拍であろうとする傾向が強く存在するということであろう。

女の場合、2拍の名の呼称基はほとんどが2拍で同じ拍数、3拍の名の呼称基も6割方3拍を保つことが多いが、4割弱が1拍短くなって2拍になる（例、知子がトモなど）（表5）。なお、2拍名の呼称基が4拍となって名の拍数より長くなるのはマンリー（真梨）、ユッカー（祐佳）、ミッカー（実香）の3種

表 4

名の拍数 (男)	呼称基の拍数					計
	2	3	4	5	6	
3 (13人)	14	37	2			57
4 (15人)	36		21			53
5 (1人)	2			1		3
6 (1人)			1		5	6
計	52	37	24	1	5	119

表 5

名の拍数 (女)	呼称基の拍数			計
	2	3	4	
2 (7人)	57		5	62
3 (22人)	64	103		166
計	121	103	5	229

5 回答で、どれも名の第 1 拍のあとに撥音促音をはさんで、末尾に長音を加えるという共通点がある。

(3) 姓と呼称基と拍数

続いて姓と姓由来の呼称基で拍数を見よう。表 6 が男、表 7 が女である。男の 3 拍の姓は 7 割が 3 拍の呼称基で、短くなって 2 拍になる（例、岡野がオカなど）のがこれに次ぐ。7 割という数字と 2 拍になる点は名と共通する。4 拍の姓も 4 拍と 2 拍の呼称基になることは名と同じ（例、竹内がタケなど）であるが、4 拍の呼称基のほうが 2 拍の倍になっているところにちがいがあがる。4 拍のままが多いのである。

3 拍姓の呼称基が長くなって 4 拍になるのはどれもウッサー（臼井）であった。3 拍姓ウスイが短縮されて 2 拍になり、その第 1 拍のあとに促音、第 2 拍のあとに長音加わったのがこの呼称基だと考えると、2 拍の呼称基を経由したことになり、また女の 2 拍名にあった 4 拍呼称基の作り方と同じになる。

表 6

姓の拍数 (男)	呼称基の拍数				計
	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	
2 (1人)					
3 (13人)	8	22	3		33
4 (13人)	11	1	23		35
5 (3人)		1		2	3
計(30人)	19	24	26	2	71

表 7

姓の拍数 (女)	呼称基の拍数					計
	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	
2 (4人)						
3 (11人)	1		4	2		7
4 (14人)		14		3		17
5 (0人)						
計(19人)	2	16	7	5		24

回答者に 2 拍姓はあるが、姓に由来する呼称で呼ばれることはない。

女の場合、姓による呼称が少ないため回答数自体が少なく、また男の場合とちがって 4 拍名がないため単純に比較はできないが、3 拍姓に 3 拍の呼称基が多い点は男の呼称基、名の呼称基（男女）に共通する。しかし、4 拍からなる姓の呼称基は 4 拍が少なく 2 拍が 3 倍以上多こと、3 拍姓の呼称基に 2 拍のものがなく 1 拍 4 拍があることが男、また名の呼称基とちがうところである。

3 拍姓の呼称基が 4 拍のものはズッキー（都築）、1 拍はハリー（半田）であった。第 2 拍に促音、末尾に長音があることはこれまで見てきた例と共通する。

2 拍姓の回答者はいるが、姓に由来する呼称で呼ばれることはない。

五 成長と呼称（まとめ）

第四章の分析によって、呼称の形式が呼ばれる人の成長とともに別の形式に推移すること、男女によってあり方が異なることなど、

多様な姿が明らかになったと思われる。下位の校種に多かった接尾辞チャン・クンが上位校種になるにつれて現われなくなり、代わって「接尾辞なし」が多くなっていくこと、その進行が男女によって異なっていることはその典型であるが、呼称基や呼称基元の形や現われ方にもちがいがあった。また接尾辞の異なり数や典型的でない接尾辞の異なり数、回答数の推移が、校種や性別と関連があることも知ることができた。呼称は、呼ばれる本人の成長段階や性別と連動しながら存在している、と考えるとよいであろう。

多様性は異なり数の推移や呼称基、標準的でない接尾辞の異なり数や回答数によく現われている。それらが多くなる時期が自我の発達期と重なっていること、男より女のほうに多様であることも興味深い。大学時代に減ったり増えなかったりするのも青年後期という時期と関係しているかもしれない。女が男より多様であるのは時代の空気を反映しているにととることもできようか。

ここまで推移と性別によるちがいを中心にまとめてきたが、それのみでなく呼称基を作る際の名・姓の短縮のしかたや新しい呼称の作り方などに、男女共通するところがあったことも心にとめておく必要があるようにも思われる。

なお、形式については典型的でない接尾辞や呼称基元の認め方など、詰めなければいけない問題もある。調査のしかたについても、今回は調査時点で過去を思い返してその呼称を求めているが、より厳密にできるやり方がないかどうか、軽蔑の意味をこめた呼び方と普通の呼び方をどう線引きするかなどの問題もある。引き続き考えていきたい。

注

- 1 調査は平田佐世が行なった。ただし、本稿の分析は別に下野が行なっており、責任は下野にある。なお、回答者の出身地については考慮しなかった。他地域出身者が少ない大学が多いこと、分析に影響を与えるような異色の回答があるように見えなかったことがその理由であるが、地域性については今後考えていきたい。
- 2 回答者は女が男より1名少ないが、1名が男女各々の全体に占める割合には大きな差がない(差は0.001)ので、実数をもって集計する(以下、同じ)。
- 3 別立てにしたビー・ピー、チ・ッチ・チーとのちがいについては検討が必要かも知れない。ただし、このことで本稿の論旨が変わるものではない(後述本文を参照)。
- 4 図5の接尾辞7種の集計では「その他の接辞」が中味を問わず一括して1と計数されているが、表1はその中味についての数字である。
- 5 ナマ、ボテコなど。男の場合と同じようにどれも姓・名とはつながりがわからない。

参考文献

- 八代京子「高校生の呼称」(F.C.パン『機能によることばの分析』文化評論出版、1983)
- 金丸英美「人称代名詞・呼称」(『日本語学』12-6、明治書院、1993)
- 尾崎喜光・塚田実千代「中学・高校のクラブ活動・部活動における呼称」(『日本語学』17-9、明治書院、1998)
- 長島裕輔「大学の体育会における呼称」(『日本語学』17-9、明治書院、1998)